

## 加藤陽子の近代史の扉

# 学術会議「6人除外」「人文・社会」統制へ触手

毎日新聞 2020年10月17日 東京朝刊



発足直後の世論調査で6～7割超の支持を得た菅義偉内閣。行政改革やデジタル庁など重要案件が待つ今、なぜわざわざ、**日本学術会議の新会員候補名簿から6人を除外して決裁するという批判を浴びるまね**をしたのか。**目的と手段の点で整合的ではなく見え、政治分析の玄人筋も首をひねる事態**となった。

少し回り道をしよう。今の大学は、高校生向けの出張講義に熱心だ。先日、ある県立高の2年生に向けたオンライン講義で、歴史学は何をする学問かについて話をした。まず、英国の歴史哲学者コリングウッドの定義では、こう説明される。「歴史の闇に埋没した『作者の問い』を発掘すること」だと。換言すれば、歴史上一定の時代に現れたり創られたりした制度・組織・論理が、なぜその時代に現れるのかを考える態度となる。制度や組織を創り出した「作者」の思索の跡をたどるのが歴史学の役割ということになる。

こう述べた後、一つの問いを考えてもらった。1889年6月、枢密院議長・伊藤博文は、歴代天皇の陵墓で場所が未確定のもの、例えば安徳天皇陵がどの墓かを治定しようとした。伊藤は、何を考えてそのようなことをしたか。答えは意外な方向からくる。伊藤は、予想される不平等条約の改正にあたって、外国の信頼を得るため、皇統の確からしさが必要と考えていた。陵墓確定という「作者」の問いは、意外にも条約改正と結びついていたのだ。

歴史家の仕事は「作者」の問いの発掘にあり。そこで、なぜ日本学術会議の名簿から6人が除外されたのか、「作者」たる首相官邸の側の思索の跡をたどってみたい。もちろん、私が名簿から除外されたうちの一人で、当事者という点はご留意いただきたい。

菅内閣は、行革やデジタル庁創設を掲げ、先例打破の改革者イメージをまとめて発足した。最重要課題の一つが、1995年の科学技術基本法（旧法）を今夏25年ぶりに抜本改正した「科学技術・イノベーション基本法」（来年4月施行）の着々たる執行であるのは明らかだ。ただ、この間の人々の関心は新型コロナウイルス一色で、本法案の国会審議に注目していた人はまれだろう。

実は、今回の改正の重要な目玉の一つが、除外された学者の専門領域に直接関係していた。日本学術会議は、第1部（人文・社会科学）、第2部（生命科学）、第3部（理学・工学）からなる。名簿から除外された6人全員が第1部の人文・社会科学を専門とする。安倍晋三政権下で成立した新法は、旧法が科学技術振興の対象から外していた人文・社会科学を対象に含めたのだ。

改正は、日本学術会議のかねての勧告・提言の具体化で、その方向性自体は評価できる。本年7月閣議決定の「統合イノベーション戦略2020」も、「人間や社会への深い洞察に基づく科学技術・イノベーションの総合的な振興」が不可欠の時代になった、との認識で書き始められていた。

今回の人文・社会系研究者6人の任命除外をめぐっては、「世の役に立たない学問分野から先に、見事に切られた」との冷笑もSNS（ネット交流サービス）上に散見された。だが、**実際に起きていたのは全く逆の事態なのだ。人文・社会科学が科学技術振興の対象に入ったことを受け、政府側がこの領域に改めて強い関心を抱く動機づけを得たことが、事の核心**にあらう。

参院で矢田稚子議員も指摘していたが、新法下で「科学技術・イノベーション推進事務局」が内閣府内に司令塔として新設されることにより、自然科学のみならず人文・社会科学も、「資金を得る引き換えに政府の政策的な介入」を受ける事態が憂慮されるのだ。

鈴木淳東京大教授によれば、科学技術政策とは、広範な国家的課題の解決を目標とし、直接的にそれを達成したり、将来的に問題を解決したりする基礎科学の振興を図る政策である。ならば、25年ぶりの抜本改正は、解決すべき重要課題を国家が新たに設定し、走り始めたことを意味しよう。

「作者」の問いに戻る。現状は、日本の科学力の低下、データ囲い込み競争の激化、気候変動を受けて、「人文・社会科学の知も融合した総合知」を掲げざるをえない緊急事態である。新法の背景には、国民の知力と国家の政治力を結集すべきだとの危機感がある。顧みれば、科学技術という言葉が初めて公的な場に登場するのは1940年8月、総力戦時の学会大再編の時だった。この流れの結末を、私たちはよく知っている。

このたび国は、科学技術政策を刷新したが、最も大切なのは、基礎研究の一層の推進であり、学問の自律的成長以外にない。国民からの負託のない官僚による統制と支配は、国民の幸福を増進しない。2度目の敗戦はご免こうむる。（第3土曜日掲載）

---

■人物略歴

加藤陽子（かとう・ようこ）氏

1960年生まれ。東京大教授（日本近代史）。著書「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」「戦争まで」など。